

### (3) 接合した礫石経が語ること（予察）

#### —下諏訪町ふじ塚遺跡の整理作業から—

河西克造

##### 1 はじめに

長野県埋蔵文化財センターは、2020・21年に一般国道20号（下諏訪岡谷バイパス）改築工事に伴い、諏訪郡下諏訪町に所在するふじ塚遺跡の発掘調査を実施した。2020年度の調査では、遺跡内にある「ふじ塚古墳」が中近世の「塚」と判明し（図1）、塚の下層からは6万点に及ぶ礫石経で構成された「礫石経塚」が確認された（図3）。

2021年度からは礫石経の整理作業を開始し、2023年度に礫石経塚の調査事例を探したところ、武田勝頼墓（山梨県甲州市）に埋納された礫石経に接合した礫石経があることがわかった（飯島2010）。かかる事象を念頭に置きふじ塚遺跡の礫石経を調べたところ、経文等の文字や梵字が判読できたものだけでも約100個体の礫石経が接合していることがわかった。

本稿は、ふじ塚遺跡に接合した礫石経がある事例報告と、それが存在する意味を検討したものである。今後の整理作業の役に立てば幸いである。

##### 2 ふじ塚遺跡の「塚」と「礫石経塚」

信仰の「塚」と判明した墳丘は土石混合で構築されており、人頭大をはるかに超え、人力では持ち上げられない礫が多量に用いられていた（図2）。塚は硬化した構築土が重層的に堆積し、最下層の構築土は硬化の度合が著しく、強固にかなり叩き締められていた。そして、この最下層の構築土下層から6万点に及ぶ礫石経が集積する「礫石経塚」が発見された（図3）。16世紀に構築された礫石経塚と16世紀に構築されて19世紀まで存続した塚が重なっていたのである（河西2021）。礫石経塚と塚が重なる事例として、物見処遺跡（東京都三宅島）の経塚（報告書では「積石遺構」と呼称。國學院大學文学部考古学研究室1992）があり、物見処遺跡とふじ塚遺跡は貴重な事例と言える<sup>1)</sup>。さらに、礫石経塚の特徴としては、礫石

経に旧石器時代のブロックを想起するブロック状の塊があり、ブロックの間には随所に隙間がみられたことがある（図4）。このブロックは、礫石経を埋納する際の単位を示すものと考えられる（河西2021）。このような事例は、近世になるが河原市経塚（石川県金沢市）でも確認されている（橋本ほか1974）。このブロックが埋納の単位を示



図1 土石混合で構築された塚の全景



図2 塚の構築に用いられた礫



図3 磯石経塚の全景

す仮定で考えると、ふじ塚遺跡の礫石経は、1点ずつ埋納するのではなく、袋状容器もしくは木質容器に入れて運搬し、そこから出して単位がわかる状態で埋納したと考えられる<sup>2)</sup>。

### 3 磕石経にみられた「異常」

上述した武田勝頼墓出土礫石経に触発されてふじ塚遺跡の礫石経を調べたところ、割れている礫石経と亀裂がある礫石経が数多くあり、前者には接合する礫石経が確認された（図5・7）。

ふじ塚遺跡における文字の書写割合は、7割とかなり多い。墨跡がないものは河原などからの採取時にすでに割れていた可能性があるため、書写後に割れたと判断される礫石経（116点）を対象としてその接合状況を検討する。

出土地点ごとの内訳は図6の通りである。大半が礫石経塚出土の礫石経が占めるが、それは礫石経塚からの出土数が多いことに起因しよう。接合した礫石経の礫石経塚における平面分布は、礫石経塚のほぼ全域で確認でき、基本的にブロック内

で接合する。ただし、ブロック間で接合したもののが2点確認された。接合した礫石経は、特定の石材に偏る傾向はない。石の中央に文字等が書写されているものは、字が中央で分断されている。ま

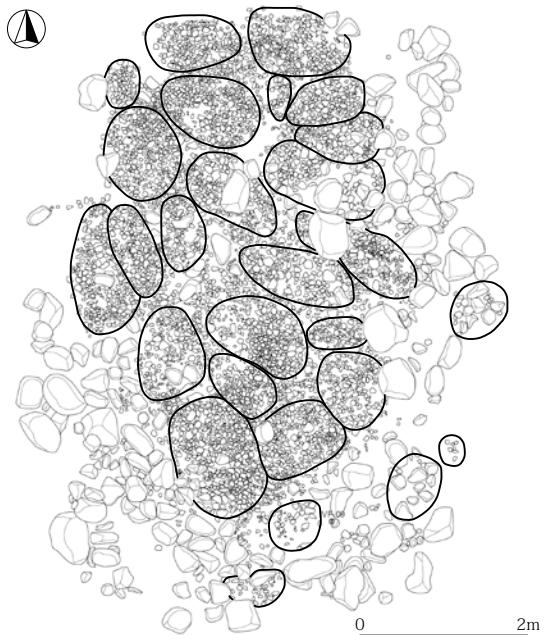


図4 磕石経塚 ブロック認識図（河西2021）



図5 接合した礫石経

た、接合箇所は石の中央部や石の側面付近など多様である。接合箇所に打点は確認されていないため、石器製作のように、一ヶ所に打撃が加わったことで割れたものではないことを示す。

#### 4 石が割れる原因

石が割れる要因は、石材の違いや石材利用の違いなど様々なものがあるが、①人為的要因、②自然的要因に大別される。②には、気候条件がある。文禄年間に豊臣系大名の日根野氏が諏訪湖沿いに築城した高島城は、寒冷地のため屋根に瓦を使用せず柿葺きにしたと言われている（浅川ほか1995）が、諏訪地域で出土した殿村・東照寺址遺跡（下諏訪町）<sup>3)</sup>と湯川経塚（茅野市）<sup>4)</sup>の礫石経には、書写文字が断ち割られたような礫石経が数多く存在する状況はない。ふじ塚遺跡の礫石経には、殿村・東照寺址遺跡と湯川経塚にはない人為的要因が加わった可能性があると理解する。なお、礫石経塚と礫石経に被熱痕跡がないことから、『善信聖人親鸞伝絵』（小松ほか1994）に描かれている火葬のように、屋外で焚いた熱の影響を受けていない。では、どうして割れたのであろうか。

#### 5 割れた原因を遺跡から考える

次に発掘調査段階で、ふじ塚遺跡の礫石経に「圧力」が加わった痕跡が確認できたか否かを検証してみたい。

塚の調査では、塚の構築土をすべて除去した。最下層の構築土は、硬化の度合が著しく、手作業での掘り下げが容易ではなかった。よくここまで叩き締めたと感心するほどであった。最下層に堆積する構築土が最も硬化しており、この構築土の下面と礫石経塚の最上層の礫石経が接する状況も確認された。さらに、塚の構築には、人力では持ち上げることが困難な人頭大の礫が多量に用いられており、この礫が礫石経塚の直上に存在するものもあった。これらの礫を除去するために人力で動かした際、礫石経が姿を現し、その中には石の中央部で割れている礫石経が存在していたのである（図8）<sup>5)</sup>。

上記の状況から、ふじ塚遺跡で礫石経が割れた

原因是、礫石経塚上での塚の構築が深く関連していることがわかった。塚を構築する際、構築土を叩き締めて硬化させたことや、塚の構築に夥しい礫を用い、かなり重量のある礫が礫石経塚の最上部まで及んだことによるものと考えられる。礫石経塚がある程度の厚さを持つ盛土で覆われていた

	出土地点	出土数	文字判読数	接合数
1	礫石経塚	61,895点	27,042点	114点
2	塚	1,415点	436点	2点
3	塚の周囲	30点	2点	0点
合計		63,340点	27,480点	116点

図6 磕石経出土数と接合資料数（R5.12月時点）



図7 磕石経の接合面



図8 磕の下から出土した礫石経  
(矢印：割れた礫石経) (河西2021)

ら、礫石経が割れるようなことはなかったと思われる。

## 6 ふじ塚遺跡における作善業

ふじ塚遺跡で行われた一連の作善業を推測したものが図9で、ここから礫石経がいつ割れたのかを推測してみたい。

116点の接合資料は、礫石経塚に伴うものと、塚に伴うものがあり、前者は、書写後から塚が構築される前に割れたと推測される(図9③～⑥)。また、塚に伴うものは、書写後から塚の構築時もしくは構築後の間に割れたと推測される(図9⑤～⑦)。このように、礫石経が割れる原因は、書写後の仮置き(集積)と礫石経の運搬、埋納時、埋納後の上部からの加圧により生じたと解釈できる。

さらに、礫石経にはヒビが入ったものや表面がぼろぼろになったものが多数確認された。加えてブロック間で接合したものがあることから、ふじ塚遺跡の礫石経は、書写後經典(特に紙本經)のように丁寧には扱われていなかったと考えられる。また、前述のように埋納後には、上層に塚が構築され、その構築方法で礫石経に圧力が加わった。このようなことから、ふじ塚遺跡の礫石経を観察した筆者は、武田勝頼墓の報告書に記載されている飯島泉の一文「(礫石経は)丁寧な埋納ではなく、まとめてドサッと入れ込んだような印象があり、」(飯島2010)には共感するものがある。

経文の文字を多数書写した多字一石経は、經典の意味をなすが、経文の1字もしくは2～3字書写した一字一石経は、經典の意味をなさないとの時枝務氏の指摘(時枝2019)が、本稿で扱った考古資料に表れているように思える。ふじ塚遺跡における一連の作善業のなかでは、「写経」にもつともウエイトが置かれていたと思われる。

今後、解明しなければいけない課題は多々あるが、本稿では問題提示をさせていただく。

## 7 おわりに

本稿は、礫石経を観察するなかで、礫石経が割れて文字が欠けているものや、墨跡はないが割れているものがあったことから、礫石経が接合した

経文等の書写から礫石経塚・塚の構築	
①	砥川等の河原から石を採取する
②	寺院・堂宇もしくは屋外で経文等を書写する
③	書写した礫石経を容器等に入れて保管するか、屋外に集積する
④	礫石経を運搬してふじ塚遺跡に礫石経塚を構築する(礫石経の埋納)する
⑤	塚の構築時に礫石経を書写し、塚の構築場所に運搬する
⑥	礫石経塚の上に土石混合で塚を構築する
⑦	塚の構築時もしくは構築後に礫石経を埋納する

図9 作善業の流れ

意味を検討したものである。

今後は考古資料としての礫石経の分析を深め、遺構(礫石経塚、塚)との関連性を導き出すことで、「礫石経が割れる原因」が解明できると考えられる。本稿はその長い道のりのほんの一歩である。

## 註

- 1) 立正大学文学部 時枝務教授からも同様な指摘があつた。
- 2) ブロックが示す意味は、今後の整理作業で解明すべき大きな課題である。
- 3) 下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館で遺物を実見した。
- 4) 茅野市八ヶ岳総合博物館で遺物を実見した。
- 5) 塚の調査時においては、硬化した構築土の土圧と人頭大を超える礫の重量が、礫石経塚に与えた影響を捉える視点が十分になく、礫石経が接合する認識がなかつた。調査担当者として認識が欠けていたことを接合した礫石経は教えてくれた。

## 引用・参考文献

- 浅川清栄ほか 1995『図説高島城と諏訪の城』郷土出版社  
飯島 泉 2010『山梨県指定史跡 武田勝頼の墓—経石出土に伴う総合調査報告書—』甲州市教育委員会  
河西克造 2021「下諏訪町ふじ塚遺跡の礫石経塚 その構造と特徴」『長野県埋蔵文化財センター年報』38  
國學院大學文学部考古学研究室1992『物見処遺跡1992』  
小松茂美ほか1994「善信聖人親鸞伝絵」「続々日本絵巻大成」〈1〉伝記・縁起篇  
坂誥秀一ほか 2003『仏教考古学事典』雄山閣  
橋本澄夫ほか 1974『金沢市河原市遺跡 一字一石経塚の発掘』石川県教育委員会  
時枝務 2019「礫石経とは」第13回特別展『礫石経』立正大学博物館  
立正大学文学部考古学研究室 1994『礫石経の世界』瓢全舎